

島尾敏雄『死の棘』の構成の一面

—草稿から作品への第四章「日は日に」の作成過程

MAUFROID Yannick

はじめに

島尾敏雄（生1917・没1986）の作品の中で長編小説『死の棘』は非常に大きな位置を占めている。妻のミホの精神病発病と彼女との葛藤を描く作品で、戦後日本文学の最も重要な小説の一つと高く評価されている。悲惨な現実を素材とした私小説のかたちをとりながら、病妻体験の危機的時期のクライマックスを描いている。

小説は一見、体験の事実に沿って語られる、といった切れ目のない、連続的な筋道を辿って構築されているように見える。その一方で島尾は「反構成」の作家だと言われることが多い。島尾自身も「反構成の傾き」があるという回も発言し、特に1967年の「どうして小説を私は書くか」というエッセイでもそれを強調している。

【資料①】 島尾敏雄「どうして小説を私は書くか」『われらの文学』第四卷一九六七年四月

「筋道をつくり、ものがたりを構築しなければならぬ掟を小説の中にかぎつけ、その掟が、式順とからみあって、私にはよそよそしく見えた。（中略）なによりもさわりになることは、私にはどんなものがたりの筋道にも興味がわかないことだ。どれほど巧妙に、そして緻密にたてられても、つくりごとの構造は、逃げ水のように、

追いかける先へ先へと移って行き、私のからだの中にひびきかえってこないと思いたがり、そのおそれがあった。(中略) 自分では管理できず、検証し分類することができないものなどもみんな含めた領域の中でしか、私は規制されたくない。」

石井洋詩^①が指摘するように『死の棘』のそれぞれの章の構成についての研究が少ないのはおそらくそのような発言が要因になっていると考えられる。しかし、従来の研究には島尾の言葉をそのまま信用する傾向が長く認められるが、新しい素材が公開されるにつれて、小説の「私小説性」も「連続性」も問題化されるようになった。例えばその素材の一つ、島尾が病妻の体験を記録した『『死の棘』日記』が2005年刊行されている。そして、2012年から『死の棘』原稿などが島尾の遺族の方達により鹿児島近代文学館に寄贈されたことの結果として、その原稿が公開されるに至った。そのおかげで島尾文学の研究者にとって、小説の構成や作成過程の調査、研究をより一層進めることができる可能性が広がってきている。今回私は特に『死の棘』第四章「日は日に」の原稿、草稿を分析し、それを通して、『死の棘』だけはなく、島尾敏雄文学における構成の問題について考察したい。

一 『死の棘』創作の起源

『死の棘』体験の筋道は次のように要約できる。ミホの心の葛藤は1954年9月から始まる。彼女の精神状態がだんだん悪化し、入院した。島尾も付き添って入院する。退院した後、1955年家族と一緒に奄美大島に引っ越す。翌年島尾は奄美大島でカトリックの洗礼を受ける。

その体験を描くいわば「病妻もの」の創作はミホの発病の翌年から始まる。島尾は「われ深きふちより」「治療」

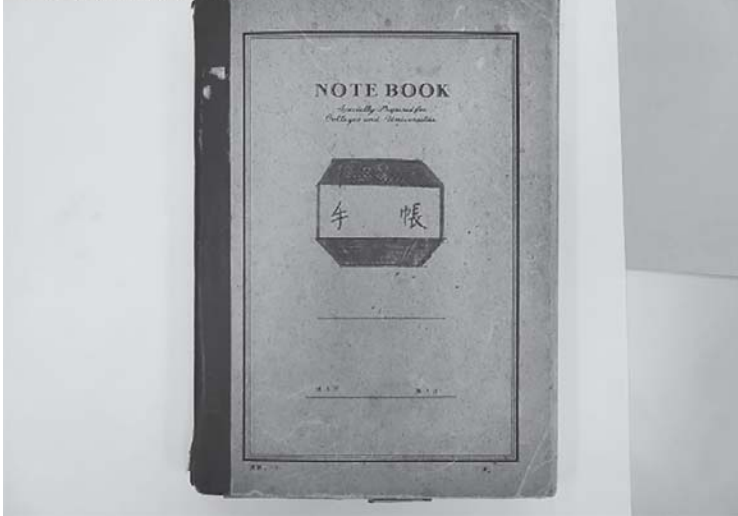
などのように、当時の病院の生活を描く「病院記」を入院中書き始め、1955～57年それらを連作している。1956年「妻への祈り」と題するエッセイを「婦人公論」に掲載する。1959年「川にて」「家の中」「家の外」などの短編小説を執筆する。1960年から妻の発病の体験、家庭の危機を描く年長編小説「死の棘」を書き始め、1976年完成した。

体験から作品への、「病妻もの」の創作過程においては変更やためらいが見られる。初期の「病院記」は入院の体験と大体同時期に書かれている。それを妻に読ませることによって資料【2】「妻への祈り」の言葉を借りるように「妻に通う」という目的を持っている。

【資料②】 島尾敏雄「妻への祈り」《婦人公論》一九五六年五月

私と妻は二人一緒に入院した。精神病の夫に妻が付添って入院する例は少くないが、患者である妻に夫が付添って入院することは例がないということ、いろいろ考慮の結果、男の患者たちの精神病棟の個室に入れて貰うことになった。そして半年近い間、私と妻とはその精神病棟の中で世間と隔絶して暮らした。そこでの奇態な生活の一端を、「われ深きふちより」という短篇集に収めた二、三の作品の中で、私は表現しようと試みはしたが、入院中に妻の発作のあいまを盗んでむしろ祈りのような気持ちで、そしてそれがいくらかでも妻に通うことを願って書いたそれらの作品が、果たして何らかの表現をなし得たかどうか。

その後、本来の目的は維持されながらも、その範囲は広がりつつある。「病妻もの」と一言で言っても、作品の間



「島尾敏雄手帳」昭和34～36年

には表現方法の違いが少なくないし、小説の方向性も異なっている。

初期の「死の棘」の構成については島尾の意図を解読するために、最近公開された資料、「島尾敏雄手帳」を参考にすることが出来る。その手帳は昭和34年から昭和36年まで書かれ、小説のスケッチ、日記のメモ、手紙の下書きなどいろいろな興味深い書き込みを含んでいる。

例えば、島尾は1960年4月10日付けの、『群像』編集長の徳島高義宛ての手紙の中で「死の棘」の第一章「離脱」に言及しているのであるが、それを前の作品「家の中」と「家の外」の間に挿入する可能性があるのではないかと考えていることがうかがえる。また、同年他の手紙で『死の棘』を、1950年代に完成した「治療」と「眠りなき睡眠」という「病院記」のプレリユードにする希望を示している。

ここでは統合的な志向が認められるのではないだろうか。つまり、島尾が自分の作品をいくつか組み合わせることで、前の作品と当時書いている「死の棘」をまとめようと努力しているように思われる。手帳では小説構成のスケッチとして「他の所に」という表現も何度も現れる。

それは「家庭のうちから家庭の外へ、東京から新しい環境への移り」という意味を持っていると考えられないだろうか。結局、島尾はその作品の組み合わせを諦め、「死の棘」を独立した物語りとして作ることにする。ただ「死の棘」の方向についての疑問は後々まで続き、第四章「日は日に」の構成の分析を通してそれを指摘したい。

二 第四章「日は日に」の草稿

島尾は『死の棘』第四章「日は日に」を1960年・11月から1961年・1月下旬まで執筆する。完成した「日は日に」では1955年の正月のあたりに起きる事実が語られている。完成原稿の内容は次のように要約できる。

「私」は仕事部屋で電気スタンドのコードを首に巻いて絞めようとしていた。仕事部屋のドアの穴からそれを覗いていた長男の伸一は妻のミホに声をかけると、ミホは部屋に入り、私を止めさせる。

正月が近付いたある日、妻が前夜に見た夢の話をする。故郷の島に帰ると、死んだはずの両親が、たくさんの人たちと一緒に大きな穴の中にいる。妻は驚いて助け出そうとすると、母に制止され、疎開小屋へ行くように言われる。年老いた父を疎開小屋に追いやっていたのだ。

夢の話は続く。妻が疎開小屋へ行くと、下半身が腐ってきた。そこに「あいつ」（※私の愛人）がやってきて、赤ん坊を土間にたたきつけた。妻はそこまで話すと、私の顔をじっと覗き込んで「あなたの子でしょう、それ」とつぶやいた。私は打ちひしがれて聞きながら、返事できない。

大晦日から、怪しい電報や紙片が次々家庭の郵便受けに入っている。ミホによると「あいつ」が打つてくると言う。メッセージには、私とミホに対する侮辱や脅威などを含んでいる。断片の投げ込みは続き、妻が発作して「あいつがやってくる」とおびえると、私は両親の故郷である福島県の相馬に一家で行くことにした。車内で、ミホは私に「情熱と愛情とサービス」の誓書を書かせる。

この章において二つの要素が多く批評家の注意を引いた。一つは冒頭に語られるミホの「島に帰って来た」という夢であり、特に吉本隆明や梯久美子により論じられている。また、語り手の愛人である「あいつ」が送ったとされた脅迫文のモチーフも様々な理論・解読の対象になっている。

しかし、その完成章の要素に至るまでに、前の草稿を考察したい。鹿児島近代文学館に所蔵された第四章「日は日に」の草稿は合わせて7点であり、それぞれの題名も内容もかなり違う。その中、短い断片もあり、例えば、草稿1が「私らの時」と題され、3枚しかない。そこで、最も長い断片の草稿2と草稿4に注目したい。

(1) 草稿2「日は夜に」について

草稿2は26枚で、「日は夜に」と題される（最初の題は「夜は日に」であったが、島尾がそれを引いて「日は夜に」という逆のタイトルに代えた）。その26枚の内容は「私」の息子である伸一を中心している。伸一が病気になる、「私」が彼を介護するという話である。草稿には伸一の病気が悪化し、熱のためうわ言を言っているという一節がある。語り手はそれを聞きながら、「もし伸一が癒えることができなければそれは私が殺したこととかわりがないだろう。それはそんなにおそろしいにんげんでありうるのか」と、自分の過去を苦しく反省する。そして「前に書いた」作品からの引用を読み返す。

【資料③】 島尾敏雄「日は日に」草稿 「日は夜に」二二・二三頁（鹿児島近代文学館 所蔵）

「私は前に書いた短編の「漂流物」をよみかえした。それには「ぼくが不在の間に、重大なこと、うまく言いつくせないが、つまり決定的な変革が（はつきりぼくに理解されているわけではないが）起きるかも知れない。ぼくは家をあげていいののか。」と書いてあった。伸一がジャツチャンゴンコンと夢の中で電車に乗っているように、私は、イケナイ、イケナイと、目まいのする波にもまれていた。でも私は乗り切ろうと意志している

のだと、自分に言いきかせる。私は流されているのではない、はじめて自分で泳ごうと心をきめて、そうやっている。今は三角波のまったただ中だ。」

この引用をもとに、物語を体験の中に簡単に位置付けることができる。「『死の棘』日記」の1954年11月15日を見ると、似た内容があるのである。

【資料④】 島尾敏雄 「『死の棘』日記」六一頁（新潮文庫）

11時30分、伸三が痛い痛いと言言でいうべくも後頭部がじんじんする（中略）伸三よ直ってほしい我が子ながら美しく立派に成長したと思ったこの頃（じゃっちゃん、ごっこん、遠い所を電車が……もう終わりでしゅ。（伸三の寝言、11時50分？））「川流れ」の読返し、いけない、いけないという声がかきこえてくる。いや既におれはぬけ出ている、今泳ぎ切ろうとしている今は三角波だ。（1954年11月15日）

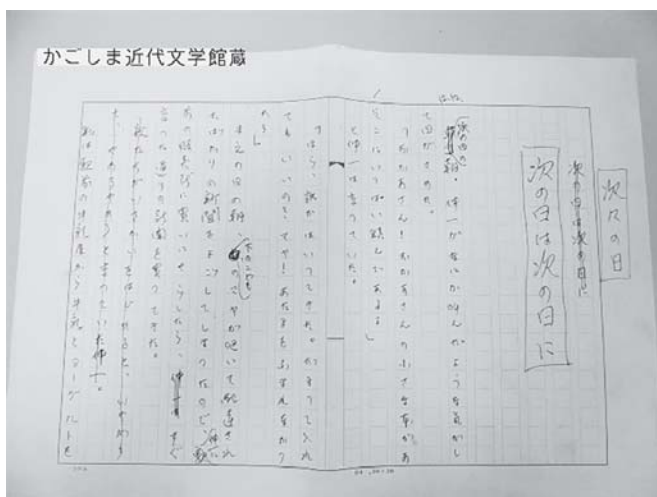
「日は夜に」には「漂流物」という架空の作品が出て来る。日記を見ればそれが実際に「川流れ」という小説であることが分かる。「川流れ」は島尾の元の作品であるが、題名は変化している。『死の棘』ではそういった題名の変化が頻繁に現れる。多くの場合、その変化によって『死の棘』の体験の過去の意味を修正できる、というような効果があることが示唆される。「川流れ」が「漂流物」になるのはもつと圧倒的な意味を持ち、今流れに逆らう必要性を示しているのではないだろうか。つまり、この二番目の草稿では「私」が自分の「漂流」を止め、積極的に家庭

に定着しようとするという話の表現を読みとれるかも知れない。

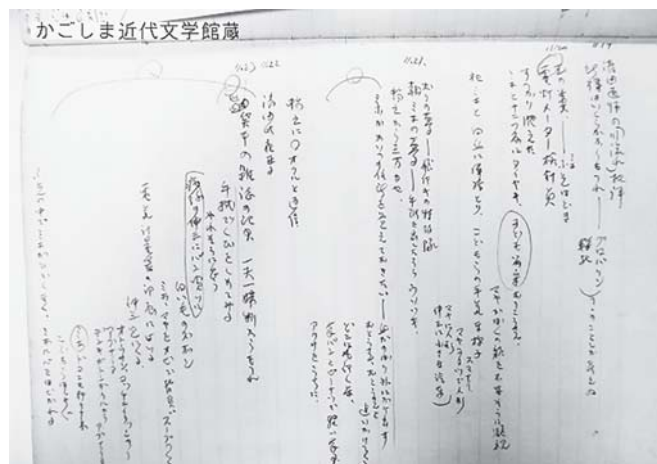
また、ここで面白いのは物語の焦点が主人公のミホだけではなく、息子にある点である。対象がそのようにして「家族」全体に少し広がって見えるように見える。結局、「日は夜に」はその一節の何枚かの後に、何の結末も見られず未完成になる。

(2) 草稿4 「次の日は次の日に」について

島尾は第四章の作成が一ヶ月ぐらい中断された後、1960年12月中旬新しい草稿を書き始める。草稿3は7枚しかないが、草稿4は46枚で、「次の日は次の日に」と名づけられている。「次の日は次の日に」は伸一の病気や父親の介護などの「日は夜に」で描かれた要素を繰り返しているが、「日は夜に」と違って、「私」の息子は早く回復し、物語は次の日常の出来事へ移っていく。この四番目の草稿の素材は日記を見れば1954年11月に当たる。「手帳」では島尾が11月の出来事を囲んで選択し、それら「次の日は次の日に」の素材とするプロセスが



「次の日は次の日に」冒頭



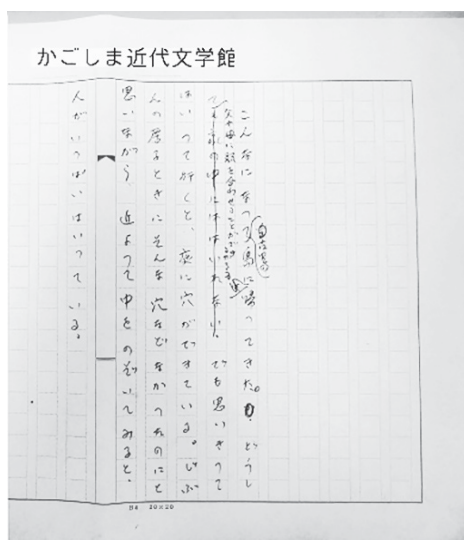
「島尾敏雄手帳」1954年11月の日記のメモ

見受けられる。その結果、テキストは「日記」風の雰囲気強く感じさせる。主題があまり見えないほど出来事が次々と語られる。結局、その「日記風」のアプローチも放棄され、この草稿は46枚のまま未完成になっている。

三 「日は日に」の完成性と未完成性

草稿5から島尾は完成された「日は日に」の要素を挿入している。その要素は体験のクロノロジーから位置付ければ1954年12月～翌年1月に起きた出来事である。だから島尾はついに1954年11月の素材を無視している。そこまで、『死の棘』の初期の章、つまり「離脱」「死の棘」「崖のふち」はみな中断無しに体験を描いてきているのだが、「日は日に」は1ヶ月ぐらいの切断を生むのである。

それと、前の草稿と違って、主人公のミホが再び小説の焦点になる。その焦点化には章の冒頭でミホに語られた夢が重要な役割を果たす。草稿では島尾がその夢の話は何回も書き直していることが認められる。



「日は日に」草稿5

【資料⑤】『死の棘』「日は日に」一五〇頁（新潮文庫）

妻は毎晩悪い夢を見て、朝目がさめると、おぼえているだけの夢の筋道を私にきかせるためにかたりだす。私は反射的に「しめ木にかけられる！」と思ってしまい、大声で叫びだすきわどいところで、やっと、おさえていけないばならない。

「ゆうべ、あたし、島に帰ってきたわよ。空は青く青くすんでいるのに、あたしはこんなからだになってしまつて、家にはどうしてもしることができないじゃないの」

その夢の話の直前に語り手は「毎晩」ミホが見ている夢について話すが、ミホが夢を語り始めたら、夢を不確定的に「ゆうべ」に位置付ける。「毎晩」から不確定な「ゆうべ」への時間的な移動をし、夢が連続する日常的な出来事の中に挟まれることにより、小説全体の語に関わることが示唆される。

また、ミホは夢の出来事を語りながら、「みんな天罰です。みんなあたしがじぶんでしたことのむくいです。」と、夢における自分の戦時の行為と運命とのつながりを表現する。そして、夢で「あいつ」が島までにきたことを怒ったり、「あいつ」が土間にたたきつける赤ん坊についてトシオに尋ねたりすることで、まるで現実の出来事を見たように夢を語る。つまり、ミホにとってその夢の内容は小説で描かれた現実の論証のように見える。

ミホの夢は『『死の棘』日記』の1954年12月27日に語られる。梯久美子^②が説明するように、実際その夢の内容の中で『死の棘』体験の過去の背景が隠されている。例えば、ミホの両親と島人と一緒にいる「穴」は戦争中島尾隊長が奄美大島の加計呂麻島の住民に掘らせた「集団自決壕」を象徴するように思われる。また、ミホが両親に行かされる「疎開小屋」、ミホの「腐ってきた下半身」、「あいつ」にたたきつけられた「赤ん坊」などの夢の要素はみな島尾の過去の出来事を暗示しながら、小説のトシオの罪、そして因果応報を強調している。

しかし、語りにおいて、その事実は全く明示されていない。語り手はミホの話をも黙って聞いて、何の説明をせず「返事できない」。「返事できない」のは自分自身が返事する権利がないと考えられるのではないだろうか。トシオはミホが「神託」か「ユタ」になったようにその夢の話をも運命の「確信」として受け止めるのである。また、吉本隆明^③などが指摘するように、その夢が『古事記』のイザナギが黄泉の国で変わり果てた姿になったイザナミに会うと

いう話と類似点があり、それも語り手に圧倒的に衝撃を与えられると思われる。

【資料⑥】『死の棘』「日は日に」一五二・一五三

「よごれはもしかしたらつぐなわれても、自分の生につきまとうらしい、未遂の、足りなさは、のぞくことができなない。妻に責められて装いをひとつずつはぎ取ったあとで、彼女に対抗できるのは、その充足しかないような場所に落ちこんで、はいあがれない。充足は手のとどかぬほど遠いところにある。これから先は、死のおとずれまで妻に満たされぬいらだちと対面していけなければならぬだろう。そのなかにいるときは、陶酔の確かめにおぼれていた行為も、そのときの報いの淵に気づかずにおおそろしい事実が目ざめた今では取りもどしようのない過失の顔つきに似てくる。」

要するに、ミホの「島への帰り」という夢の前景化を通して、小説の時間性が「日常」の時間から「神話」、または「運命」の時間へ突然移行したと言える。そう考えると、一見「日は日に」のタイトルは逆説的に見えるのではないだろうか。しかしながら、「日は日に」のタイトルの意味は日常の連続性だけを表しているわけではない。実際、石井洋詩が指摘するように、カトリックの聖書の「詩編」からの引用であるように思われる。^④

「天は神の栄光を語り

大空はみ手のわざを告げる

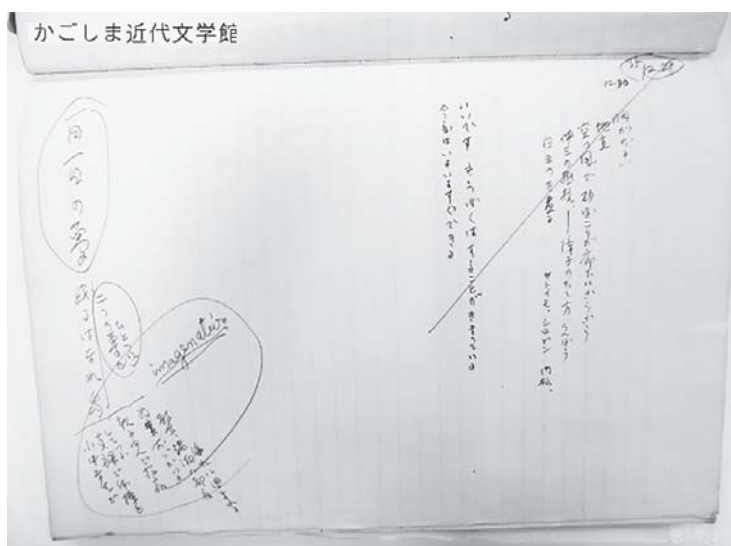
日は日に言葉を語り継ぎ

夜は夜に知識を伝える」

『死の棘』の中、「日は日に語り継いでいる」のはミホの言葉なのではないか。つまり、それは日常の切断に関わらず、絶えず真実を欲求したり、確立したりする言葉である。それにより、「私らの時」、「夜は日に」、「日は夜に」、「次の日は次の日に」などの章題を何回も修正したあげく、島尾は超越された日常の物語を神の言葉を使い表現したのだ。日常の夢的な、非理性的な要素を重視するのも同じような結果をもたらしたと考えられる。これが確かに島尾の代表的なテクニクと言える。

（一）「夢」への過程と「島」への過程

島尾は昭和35年12月30日に大文字で手帳に「一日一日の夢」、「ひとつに二つの夢を」、「[imagination]という言葉を書き記している。この12月30日は島尾がミホの夢を挿入した草稿を書き始める時点にだいたい相当する。つまり、「日は日に」の作成過程は「夢」への過程として解読できる。夢が物語の解決として現れているのだ。これも島尾の文学の中によく見られる方法だ。



「島尾敏雄手帳」、昭和35年12月28日

「日は日に」の作成は「夢へ」の過程であるとともに、そのミホの夢の内容を考慮すれば「島へ」の過程でもあると言えるのではないか。ところで島尾は「日は日に」の半年間後『島へ』という夢的な作品も書いた。島尾にとって本来「日は日に」と『島へ』との間につながりがあったことも明らかである。

【資料⑧】 島尾敏雄「『島へ』後書き」一九六二年五月

「私のつもりでは、「帰魂譚」や「島へ」の、夢だかうつつだか見定め
のつかぬ世界を出入しているかたちの、もっと充実したものの方に、小
説の総合的な可能性を考えています。その意味では「日は日に」と「マ
ヤと一緒に」は「帰魂譚」や「島へ」の一部を拡大したものと言えるか
もしれません。それは総合的な可能性を含んだ小説の中に組み入れられはじめて、その意味を示しはじめるような
気がします。（中略）もっとも、「日は日に」の方は、ふたりの人間の初歩的なかかわりあいである夫婦のあいだの
交通の記録としての「死の棘」のあとさきの小説のひとつとして書きましたから、このあと同じほどの分量の短編
が三つ四つ書き足さなければ、ものがたりとしても大団円にたどりつけないわけですが、それがいつ書けるか自分
でもわからぬまま、ここに収めた四篇をやっと書き終わったばかりのところだと言っていいようです。」

「『島へ』の後書き」で、島尾はその二つの作品と合わせて、『帰魂譚』と『マヤと一緒に』という他の小説を4つ

集め、総合的な小説を作ろうとしたと説明する。島尾の目的が「夢」とリアリスティックなかたちを組み合わせ、東京から、島への移動を表現することにあるように思える。しかし、島尾は作品を四つ完成させたのに「力及ばず」と言い、それらを「総合的なもの」にすることにも成功しなかったと言っている。その代りに、「日は日に」の後、つまり『死の棘』の続きを優先させた。

(2) 『死の棘』第五章「流棄」の日常への帰り

『死の棘』第五章「流棄」は家族が東北に避難する話が語られている。その中で、トシオとミホは自殺未遂をし、その後家族は何の解決にもたどりつかず東京に帰ってしまう。「日は日に」の過程が「他の所」への出発の約束を表現していたとすると、一方「流棄」は反対の方向、日常への帰りを象徴しているように思われる。『死の棘』の分疑点と捉えられる1961年〜63年の時期では島尾が「東京」と「奄美」か「東北」との間、そして家庭の小説と島の小説の間の「往復」を繰り返しているが、決定的な目的地に至らない。『死の棘』の中では、このような「未完成の出發」が相次ぎ、小説の意味を表していると言えるのではないだろうか。

おわりに

島尾の草稿や自筆資料などを分析すれば、『死の棘』の初期から、特に「日は日に」で、小説の構成についての疑問が相次ぐことがわかる。島尾は家庭から「他の所に」への方向転換を何回も行ってみるが、その試みは放棄される。しかし、第5章「流棄」以降、構成についての疑問は消えていく。というより、そのような「未完成の出發」という構成が小説の構成そのものになる。循環的な物語性を通して意味を表すのが島尾の「総合的な」方法になる。

本発表は「日は日に」の作成過程の要点に触れていたが、他にも興味深い点が残る。特に、「あいつ」が送ったとされる「脅迫文」のモチーフは章の後半に現れ、批評家によってよく論じられる点である。脅迫文の送り手や目的について色々な疑問や理論があるのだが、草稿を分析してそれを解明できるだけでなく、島尾の方法もより一層理解できる。『死の棘』は今まで研究が少なくないが、最近公開された資料を読むことで、まだ発掘されていない財宝のような小説と感ぜられる。

【注】

- ① 石井氏は『死の棘』各章ごとの綿密な分析、十二章間の関係や構造の解明など、小説の展開に即した丁寧な読み解きはあまりなされてこなかったように思われる。」と述べる。(石井洋詩「死の棘」考」群系・二〇一五)
- ② 梯氏は「疎開小屋で下半身が腐ってきたという夢の中の状況は、島尾との性的な結びつきのために地血を疎開小屋に追いやったことを暗示している。さらに思い出されるのは、島尾が梅毒をわずらっており、ミホが島でそれをうつされていたという、第一章で取り上げた事実である。」などを説明し、「読者の理解を前提とせず、事実の断片をそのまま小説の中に埋め込むことを島尾はしばしば行っている。」とも述べる。(梯久美子「狂うひと」(新潮社・二〇一六)・一八五～一八九頁)
- ③ 吉本隆明「全集作品集第九巻・作家論三・島尾敏雄」勁草書房、一九七五、一五二～一五五頁
- ④ 石井、「死の棘」考」(前出、一六〇頁)

* 討論要旨

司会の野網摩利子氏は、日常の時間から神話的・運命的な時間への移行という指摘について、具体的にはどのようなものか、と質問した。発表者は、『死の棘』の初期の章では日常は連続的に書かれていたが、第四章のミホによって語られる夢からそれが変わっていると考えられることを延べ、その夢は、神話と運命の要素を多く含んでおり、そうした神話枠の夢を使うことで時間性の移行も表現したかったと解釈出来る、と回答した。野網氏は、循環的構造という指摘とも関わるのではないかと述べた。